

水道・下水道の未来を支える「ウォーターPPP」とは？

蛇口をひねれば水が出て、使った水はきれいに処理される。私たちにとっては当たり前のことですが、その仕組みを支える水道・下水道はいま、大きな転換期を迎えています。そこで注目されているのが「ウォーターPPP」です。PPPとは「官民連携」のこと。ウォーターPPPIは、水道・下水道・工業用水道の運営に、民間企業の技術やノウハウをこれまで以上に活用していこうという仕組みです。

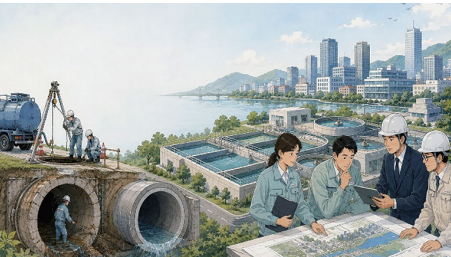
これまで自治体では、施設の運転管理、点検、修繕、設備更新などを、それぞれ個別に発注するケースが多くありました。ウォーターPPPでは、こうした業務を長期的・一体的に考え、自治体と民間企業が協力しながら管理していきます。

では、なぜ今この仕組みが必要なのでしょう。背景にあるのは、「ヒト・モノ・カネ」の問題です。上下水道を担う自治体職員は減少傾向にあり、高度経済成長期に整備された施設や管路は老朽化

が進んでいます。一方で、人口減少などによる料金・使用料収入の減少も見込まれます。つまり、これまでより少ない人員や財源で、増えていく施設の維持管理や更新に対応していかなければなりません。今までと同じやり方を続けるだけでは、将来の水インフラを維持することが難しくなる地域も出てきます。

そこで、民間企業の技術や経験を生かし、長期的な視点で効率よく管理していこうというのがウォーターPPPの考え方です。国も導入を後押ししており、すでに全国各地で具体的な取り組みや検討が始まっています。もちろん、民間に任せればすべて解決するわけではありません。長期間の契約になるからこそ、サービスの質をどう確保するのか、自治体がどのようにチェックするのか、地域企業が参加できる環境をどうつくるのかなど、慎重な制度設計が必要です。

ウォーターPPPは、単純な「民営化」ではありません。公共が責任を持ちながら民間の力も活用し、これからも安全で安定した水インフラを守っていくための選択肢の一つです。普段はあまり意識することのない水道や下水道。しかし、その「当たり前」をこれからどう守っていくのか。人口減少や施設の老朽化が進むなか、これまでの仕組みを見直す動きは、すでに全国各地で始まっています。ウォーターPPPIは、遠い未来の話ではなく、これからの水インフラを考えるうえで、身近になっていく仕組みの一つなのかもしれません。



テクノの横顔

～社外でも活躍しています～の巻 vol.12

日頃分析や測定技術員としてお世話になっている当社の社員たちですが、社外においても研究発表会等で活躍する場が増えてきており、日常業務の傍ら、研究や資料作成なども行っています。今回も直近の活動例をご紹介します。



メンバー	企画開発事業部 技術開発 Gr 長 長瀨 惟真	企画開発事業部 技術開発 Gr 主事 永尾 桂三	四日市分析センター フィールド Gr 技師 野口 亮太
内容	一社) 日本植物病理学会 第5回種子病理研究会セミナー 登壇 (2026.6) 「他分野からの新規参入機関から見た植物病理検査」について講演	一社) 日本植物病理学会 第32回 土壤伝染病談話会 登壇 (2026.8) 「三重県内圃場における土壤中フザリウム菌密度と B/F 比の現状把握」について研究発表	論文発表： ①Journal of Vertebrate Biology ②Biogeography 「中部地方におけるアブラボテの系統地理構造と遺伝的攪乱」ほか

東海テクノからのお知らせ

2026年度 東海テクノ環境セミナー開催

「企業に求められる環境リスク対応セミナー」と題し、土壌汚染対策法に基づく土壌調査・修復の基礎から、国内外で規制強化が進むPFASへの対応までを分かりやすく解説します。実務に役立つ最新情報をお届けしますので、ぜひご参加ください。

開催日時／2026年11月4日(水)

13:30～16:30 (受付13:00～)

会場／四日市商工会議所 会議所ホール

参加費／無料

詳細は東海テクノホームページをご確認ください。

<https://www.tokai-techno.co.jp/topics/16243/>

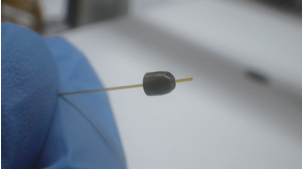
申し込みURL



社員プチコラム

小林 義則 (環境事業部 四日市分析センター ラボGr)

昨年まではフィールドGで測定業務をこなしていましたが、今年から約30年ぶりにラボGで水質分析を担当することに。ガスクロマトグラフに試料を注入して測定することを昔の感覚で「ガスクロを打つ」というと、若手社員から「ガスクロを打つって感覚が分かりません」といわれる現在。オートサンプラーで試料注入を行うのが当たり前になったんだと今更ながら実感しました。キャピラリーカラムを見えないフェラルの孔に通せず四苦八苦している日々ですが、若い人達に迷惑を掛けよう少しずつ慣れていきたいと思います。



キャピラリーカラムをフェラルに通した写真

編集後記

コラムで紹介された「ガスクロを打つ」という言葉のように、技術やツールの進化は目覚ましく、日々の業務も時代とともに変化しています。一方で、どんなに自動化が進んでも、支えているのは現場一人ひとりの技術と探求心です。今月号でご紹介した研究活動やセミナーも、そうした日々の積み重ねですね。私自身も奥の深い農業の世界を学ばなければと日々アップデート中です。(みっちー)

